

近代中国知識人の日本文明理解の態様

——蔡元培の日本観をめぐって——

蔡 建 国

1. 問題の提起

近代の日中両国は対立と協力の両面において密接に結びついており、近代中国の知識人の日本文化に対する認識をぬきにして論じることはできない。

近代日中関係史の特質を検討する時、近代中国知識人の日本観とくに中国知識人の代表である蔡元培の近代化思想の形成及び発展と日本の現実との関係には注意しなければならない。かつて日本の中国侵略に対して強く批判した蔡元培は、日本の文化の理解にも強い関心を持っていた。そのような両面の日本観を持った蔡元培の日本認識から、中国知識人の日本文化理解を解明することができるであろうと思われる。

私が関心を持っているのは、清末民主主義思想の発生期より中華民国期に至る、蔡元培の近代化思想の形成過程で、近代日本からどのような影響を受けたのか、西洋の衝撃の下で彼の思想と近代日本の関係はどのように結びついているのか、また、彼は、日本の文明に対して、どのような理解をしていたのかという点である。歴史学者は彼がドイツ、フランス及び欧米諸国の民主主義的文化思想の影響を大きく受けて、これに精通していたというが、もう一つの重要な事実を見逃している。実際に、彼が、日本からも大きな影響を受けたことは重要な事実である。彼が若い頃、西洋に学ぶのに、まず、日本に学ぶことから始めた事実からして、日本の教育、文化の影響を長期にわたって受けたというもう一つの側面

を見逃してはならない。半世紀余の間、研究者達は、蔡元培研究の分野において大きな業績を残した。しかし、ただ彼と近代日本との関係の研究が欠けており、彼の思想形成、発展と日本から影響を受けた要素の分析も欠落している。従って、蔡元培の日本認識についても解明されていない。このため、近代中国知識人の日本文明の理解についての把握は十分であるとはいえない。

本小文では、近代日中関係史の視点から、蔡元培と近代日本の間を探究し、更に近代中国の知識人の日本文化理解の態様を明らかにすることを旨とする。

2. 中国知識人の日本文化認識——蔡元培の日本観から

中国における近代日本文明の理解は、中国思想界の代表的先駆といわれている蔡元培の日本観に関する捉え方を分析することによって、ある程度解明できると思われる。

明治維新後、鎖国政策から脱却した日本は、従来崇拜してきた中国文明から離脱して西欧文明に接近し、所謂「脱亜入欧」を目指し、各領域において大きな改革事業に乗り出した。そして、新生日本の文明が、その伝統文化を維持しながら、西洋文明を導入して、自ら特色ある文化を作り出したことは周知の事実である。

一方、列強の侵略を受けて、半植民地半封建の民族的危機に直面していた中国においては、救亡図存のために「西洋に学べ」という目標を強調した先進的中国知識人は、西洋に学びながら日本に学ばなければならないという認識に達した。19世紀末、中国の維新派は「日本を以て師となす」と呼号し、維新派それに革命派も、日本に滞留して、日本の文化を真剣に勉強し、日本における自強の経験の中から、中国社会を改造するために有益な思惟方法を学びとることに努力を傾けた。

このような西洋の衝撃により激動した中国社会の潮流下において、蔡元培は、近代国家及び文明国建設の理念から出発して、西洋の文明、先進文化、思想、制度を中国社会へ導入する必要性を認識し、また、伝統文化の精髓を維持、保護し、同時に有用な外来の文化、思想を吸収し、これらを融合させることによって社会の変革が実現すると認識したので

ある。同時に、日本の近代化が成功した原因、日本の文化などにも注目したのである。蔡元培は、中国の伝統教育を受け、儒教文化の薫陶を深く受けた。当時は戊戌変法が失敗し、朝廷政治が腐敗していた時であり、彼は、士大夫としての道を歩みながらも、社会の中では、固有の伝統文化と先進的な外来文化とが共存しているを感じとっていた。そこで、「朝廷の官吏は西洋の学問を競って言いあい、元培は翻訳書を渉獵し始めた」¹⁾と自述している。

蔡元培が日本の近代化思想に関心を抱いたのは日清戦争直後である。1840年のアヘン戦争以後、日中両国は西洋から大きな衝撃を受けたが、結局全く違う経路をたどった。開国した後、明治維新を達成した日本では近代化路線を追求し、これを実現した。日清戦争における中国の敗北は、この僅か28才の青年翰林に新しい刺激を与えた。彼は、日本の戦勝の原因を分析して、その主な原因は、政治制度、文明思想、経済政策等に至るまで中国が日本に及ばなかったからであると認識した。また、敗戦の結果、中国に生まれた鋭い危機意識と勢い盛んな革新思潮は蔡元培にとって一つの巨大な衝撃であった。近代化を急速に実現した島夷民族日本はなぜ巍巍たる大国を打破し得たのか、半植民地の中国は日本の経験に注目しなければならない、ということが当時彼が関心を持ったテーマであった。顧厚琨『日本新政考』、岡本監輔『日本史略』、沈敦和『日本師船考』等、日本の状況を紹介した書籍及び多くの外国の科学技術に関する書籍などを閲読した彼は、欧米の新しい知識に注目しはじめると共に日本の事物にも大変興味をもった。また、彼は、当時の僅かな中国語訳の洋書では要求を満たすことができず、更に広く深い知識に接するために日本語を学び、翻訳を始めた。彼は日本語を、欧米文化を理解するための橋渡しと考えたのである。それゆえ彼は、「日本語に訳された洋書は大変多く、値段も安いので、日本語が読めるということは世界の新書が読めることに他ならない」²⁾と判断した。このように日本に大変関心を抱いていた蔡元培は、当時次のような教育活動をした。

1898年から友人と北京に東文学社³⁾を設けて日本語を学び始めた。以前から準備は始めていたが、東文学社が成立した後は陶大均を招聘して日本語を教えてもらうことにした。しかし、間もなく陶は天津へ行くことになったので、蔡が日本人の野口茂温を代講に推薦した。

日本語を学び始めて10日もたたないうちに彼は日本語を中国語に訳す練習を始め、そのころ「万国地誌序」及び「日本人敗明于壤」等を訳述することがあった。

ここに指摘すべき点は、蔡元培が、樽井藤吉の『大東合邦論』（1885年）に示されたアジア観に対して賛同の意思を現わしたことである。樽井は、日韓両国が徹底して対等の立場で合併し、「大東国」となって中国との連合を進め、ロシアの南下に対抗する事を提起していた。上海大同訳書局は題を『大東合邦新義』として出版した。内容は原本の複製であったが、数ヶ所訂正があった。蔡元培は、1898年にこの本を閲読し、原文と見比べて修正部分を検出し、その後、読書ノートに書きとめた。ここに注目されることは、蔡元培が張園における演説の中で、1903年に昂まった反露抗仏運動に対して、積極的に応じたことである。ここに、ある程度『大東合邦論』からの影響が認められると考えられる。

蔡元培は戊戌変法失敗の直後、翰林から革命に身を投じて、「新式学校に服務し始め」た⁴⁾のであるが、重要なポイントとしては、この新人材の養成と新思想の宣伝を標榜する中西学堂で「私が入った後、日本語課程を添設し」⁵⁾、中川という日本人を教員に招聘した点である。日本語教育を重視し、日本語人材を育成すると共に彼自身も日本語の学習を継続し、日本語の「日清戦史」などを閲読した。

日清戦争直後、彼は、中国の失敗の原因を分析すると同時に、国家の危機を救うためには人材の育成にとくに注意しなければならないと認識した。彼が愛国学社の学生に説いたのは、国家を救助するためには国際関係を理解し、外国語を学び、外国書を読み、演説の訓練をし、それによって民衆を目覚めさせる、ということであった。「現在中国は各国に虐げられ、この状態に至っている。『敵を知り己れを知れば百戦危うからず』。我々は自分の弱点を知り、また国際情勢を理解しなければならない。国際関係を理解するには外国語に通じ、外国書を読む必要がある。英語は当然学ばなければならないが、日本語に通じていれば比較的容易に日本書から国際情勢を理解することができる。」⁶⁾「中国国民は極度の苦痛を受けており、また苦痛の原因を知らない。立ち上がって団結し、自分達で苦痛を取り除くことができないのが中国の根本的弱点なのである。君達は将来卒業してから民衆を呼び醒まし、彼らの知識を広げなけ

ればならない。」⁷⁾彼は学生に正課以外にも日本語を学習するように奨励し、自ら日本語の教師を担当して学生が自由に参加できるようにした。蔡元培は自分が本を読む方法で学生に教え、一面で学習させ、一面で翻訳させた。また演説弁論の会合では日本語の演説をいくつか提示し、学生の参考にさせた。以上の事実は蔡元培が新式学校において日本語学習の提唱に非常に熱心だったことを説明している。中国では、20世紀になってから日本留学風潮が高まったが、この熱潮がおきる前に国内の学校で日本語学習を提唱していたことは実に気風の先端を切り開いたということであり、ある時代的意義を持っている。蔡元培は広く新学の基礎に触れ、既に欧米先進国の新学が中国の危機救済の良薬であることを認識しており、また日本語が新しい知識を学習するための方法であることを把握していた。このことは、蔡元培が伝統的文化を持ちながらも、その束縛からは脱し得ていたことを示している。

蔡元培は、中国伝統文化の基盤を固く持っていると同時に、日本の哲学書を通して日本の哲学研究成果から影響を受け、また、西洋哲学思想の理論を以て東洋哲学を研究し、中国の伝統的哲学思想の研究を発展させた。そして、20世紀初期、中国において西洋の倫理観念と伝統的倫理観念とが激しく衝突した際、蔡元培のこの哲学研究成果は、当時の中国において開学の風潮の先駆けとなり、学界の注目を集めた。彼の哲学思想は、彼の学術思想の重要な部分を占めている。当時、蔡元培は下記のように日本の書物の翻訳出版を始めとする活動を行なった。

(1) ドイツのCoppet氏が講義して日本の下田次郎が筆記した「哲学要領」を日本語から中国語に訳し、商務印書館より出版した。それは、彼が、編集翻訳した最初の著作であって、これによって彼の最初の哲学的基礎が定められた。その書物は当時の中国の学界における哲学の教科書の先駆となった。

(2) 彼は革命活動に従事している時にも学術研究を続け、日本の著名な仏教哲学者である井上圓了（1858—1919）の『妖怪学講義』の翻訳に力を注いだ。蔡元培は数年かけて6冊を訳出し、そのうち「総論」の部分は1906年9月に出版された。しかし、残りの5冊分の原稿は全て、書店が火事に見舞われて焼失してしまった。蔡元培は、日本人が最初に西洋哲学を摂取した時の態度と反応を代表するこの書籍を中国に紹介し

て、当時の中国人の哲学に対する態度に影響を与えた。

(3) 蔡元培が1900年に書いた「仏教護国論」のなかには極めて明らかに日本仏教学の影響を受けた痕跡がみられる。彼は、「中国は日本の本願寺章程に倣って一般学校及び専門学校を設立せねばならない」と考えた。

(4) 蔡元培はかつて、日本人蟹江義丸の日本語訳の本を参考にして、ドイツの哲学者である Paulsen の著書『倫理学原理』をドイツ語から翻訳した。これは1909年10月商務印書館から出版され、漢訳の世界名著の一つに列せられた。

(5) 1910年4月、蔡元培が編集執筆した『中国倫理学史』もまた、商務印書館より出版された。19世紀末、西洋の資産階級の倫理学説が陸續と中国に紹介された時、西洋の倫理観念と中国の伝統的倫理観念とは激しく衝突した。そこで、蔡元培は日本の学者である木村鷹太郎と久保得二の東洋倫理学史を研究し、その基礎に立って中国の伝統的倫理学説を系統的に整理し、中国で最初の倫理学史の著書を執筆した。それは彼の学術面における代表作となった。同書は1941年、日本の中島太郎によって日本語に訳され、東京の大東出版社より出版された。

(6) 1924年、蔡元培は『簡易哲学綱要』を書いた時も、やはり日本の宮本和吉が編集した『哲学概要』を参考にした。

蔡元培は日本に留学したことはなかったが、日本の書物を非常に重視し、多くの種類の日本語の書籍を中国語に訳して成果を上げ、大いに注目された。西洋の方法を用いて東方の学術を研究する一方、彼が日本語の書籍に大変啓発されて、深い伝統文化の基礎を持っていたにもかかわらず、ほかの西洋へ留学した人々に比べてより深く西洋を理解し得たのはなぜか。このことを考えるとき、蔡元培思想の形成発展過程において、日本の著作の彼に対して及ぼした役割が顕著に見てとれるであろう。

上述した事例によって、近代中国知識人が日本に学び、或いは日本を通じて西洋に学んだ潮流の中にあって、蔡元培もその例外ではなく、彼の早期思想の形成及びその発展に近代日本文化の影響があることは明らかである。また、この側面には、近代日中文化交流の作用と意義も積極的に現われている。

3. 中国知識人の明治維新認識 ——蔡元培の反思と反省を中心に

明治維新の成功と戊戌変法の失敗によって、日中両国の国体と国情の異なることがはっきり示された。両国は近代史の出発点における境遇が似ており、また同じ漢文化圏の隣国として社会改革のために同様の維新の方法を採ったのであったが、結局は全く異なった相貌を示す結果となった。維新の成功と変法の失敗はこの国体と国情の相違を示唆しており、また蔡元培もこの問題に対して真剣に取り組み、彼の反思と反省の内容は積極的な意義を持っていたのである。

明治維新から30年後、1898年戊戌変法が失敗したことによって改良主義の破産が宣告された。そのため、先進的な知識人は革命思想を受け入れ、革命の道を切り開いた。蔡元培は、戊戌変法が失敗した後、「清朝が無力なため革命は避けられない。官職を捨て帰郷して教育に従事し、民智を啓発すべきだ」⁸⁾と考えるに至った。彼は、康有為、梁啓超の変法運動が失敗した理由を、「革新的人材の養成を先にせずして少数のもので政権をとり、頑固な旧勢力を排斥しようとしたため、一面的に情勢を見ざるを得なかった」⁹⁾と理解していた。彼は自身の観察と体験から中国の大きさと積弊の深さを感じとって、根本的に人材の養成に着手することなく、ただいくつかの詔書によって改革を行なおうとするのであれば、この全く腐敗した状況を転換することは不可能であると考えた。そこで彼は断固として新しい道を選んだ。それは、明治維新以後、教育を重視し、人材の培養を重視した日本の経験から深刻な啓示を得て、「救亡図存」のため、教育に献身し、人材を育成することであった。彼は、政治改革のためにはなによりも人材育成が必要であり、教育が人材育成の根本過程であるということをはっきりと認識した。

1898年10月、彼は高い官職を辞して、妻と共に紹興に戻った。そして紹興中西学堂の監督になり、その後、上海澄衷学堂、南洋公学等で教鞭をとって、翰林から新人材の培養に身を投じるようになる重大な転換を図った。私は、これが彼の一生における重大な思想と行動の転換の画期であると考えられる。

蔡元培は戊戌変法が失敗した教訓から人材育成の重要性、そして国家を救済する人材を養成するためには、世界の新潮流を代表する新学に通じ、これをマスターしなければならない、ということを知るに至った。当時、蔡元培は近代国家構築の目標をめぐる、一貫して国家近代化のための人材の培養に傾注していたが、それは知識の育成のみにあつたのではなく、近代新思想の啓蒙をも重視するものであった。

20世紀初期、彼が近代国家観に基づいて、「教育を名目として秘かに革命を鼓吹する」¹⁰⁾ために、友人と一緒に1902年上海に創立した革命団体である中国教育会は、中国ブルジョア民主革命に呼応するものであった。中国教育会の目的は、「理想的国民を生み出し、それによって理想的国家を作り出そうと切実に思う」¹¹⁾ということであった。そして「我々は共和制下の国民を作り出したいと思ひ、そのためには共和制に基づいた教育が必要となる。共和制に基づく教育が必要となり、それゆえにまず、共和制に基づいた教育会を造るのだ」¹²⁾ということであった。その民間の革命結社の章程には、「当会は中国の男女を教育することによって、その知識を開発し、その国家観念を増進し、もって国権の基礎を回復する」¹³⁾とある。ここから次の2点を指摘することができる。(1) 中国教育会の性格には、蔡元培の共和的近代中国の建設、また、それに適応すべき共和的教育の理想が示されている。(2) 蔡元培は、日中両国の国体と国情の差異とそこから生まれる国家理念の相違を理解しており、その理解の上に立って理想的共和国を造ろうとした。その意思は孫文の「民国を創立す」という目標に一致していた。日本の維新運動を国家理性によって成功させた方法は、中国には不適當であるとはいえ、教育の重視、民智の開発、人材の育成などの経験は、中国にとって重要な啓示になったということが、蔡元培が積極的に反思したことの結論であった。彼のこの先見的認識と実践は、1905年から1907年にかけて行なわれた革命派と改良派の間の論戦において、その妥当性を証明した。

当時、愛国女学校、愛国学社、光復会などの組織の活動は、日本の近代化思想の影響を受けている中国留日学生運動に結びついていた。これらの留学生は中国教育会に電報を送って彼らの運動への支持を訴えた。また、中国教育会と愛国学社は義勇隊を組織し、それを軍国民教育会と改称し、東京にいる留学生と団結した。この一連の事件は上海—東京の

革命運動の呼応をもたらしたが、その影響は辛亥革命直前の中国思想界にも波及して、民主革命思潮が高まり、蔡元培はその中核となっていた。蔡元培が、腐敗した清王朝の支配を排除し、中国社会を改造して中国を近代化する事業のために不可欠な人材の培養を訴えたことは、辛亥革命直前の中国思想界に深刻な影響を与え、また、近代社会を樹立するために有益な理路を提供したのであった。

蔡元培の中国近代化に向けた思想の営為において、教育改革及び教育の近代化は重要な内容である。彼は、その教育思想の形成と発展の過程において、近代日本の教育体系を参考にし、その教育制度を取り入れ、中国近代教育に多面的な改革を加えた。清末からの教育活動の中で、彼は日本の学制と教育方針に影響され、啓発された。従って、中華民国臨時政府教育総長に任ぜられてから北京大学学長時代に至る十数年間に於いて、彼が、中国教育制度の改革、中国学制の計画、課程の制定及び教育方針の確立にあたって、日本の範型を参考とし手本としたことは、必然であった。

蔡元培は北京大学学長を努めていた1918年当時、教育面に現われた日本が発達した原因と中国が低迷する原因に関して、次のように分析して述べている。「十九世紀後半の日本は、国力の衰弱は米国と同じであった。また、その富強への道も米国と同じである今日、強国と称してはいても、その大学の卒業生で海外に留学するものは後を絶たない。おそらく、そうでなければ學術の更なる向上に不充分であるからであろう。」¹⁴⁾「今中国は米国の十分の一ほどの強さで、科学も未発達であり、それは昔の日米に比べても甚だしいものである。わが国の子弟の資質が日米の人に劣っているのではない。學術が幼稚でも欲求は高く深く、無道に苦しむのみである。今大学では、研究所を設け、分野ごとの研究を行なっているが、更に立派な状態に達することを希望している。しかし、創設当初は多くは簡単なものであって、欧米と対抗しようとするのにはまだまだ不充分である。しかし、国家の富強を欲するが故に、學術の発達を促し、留学生を派遣し、これらを当面の急務となし、一日としておくらせることはできないのである。」¹⁵⁾この言葉の中で、蔡元培は中国の国情の現状認識から出発して、中国近代化の実現、つまり文明国の創造を図るには、教育と科学の発展、人材の育成などの必要性を指摘している。

蔡元培が教育総長時代に発表し、中国教育史において画期的意義と積極的作用を果たしたと高く評価されている教育制度は、少なからず日本のものを模倣したものであり、例をあげると「軍国民教育」も日本の影響を受けている。蔡元培は、この種の現象について次のように分析している。「現在に至るまで、我々の教育規定は日本にならうことが非常に多い。これは我々がなござりにしていたからではない。我々は日本の学制がもともと欧州各国に倣ったのを知っている。ただ、欧州各国の学制も歴史上少しずつ形成されたもので、画一的に整っているわけではなく、また、西洋人の特別な慣習も含んでいるのである。日本は明治維新の時に西洋各国の制度を取り入れ、これを折衷したが、その経験に倣うことが中国に適したものである」¹⁶⁾。また、北京大学学長時代の1918年1月、蔡元培は、「大学改制の事実及び理由」という一文の中で「今が各学部改組の時期である。アメリカや日本などの国の大学の法学部が商学科を設けているのに倣い、すぐに現存の商部を商学科に改め、法学部に属させるのだ」¹⁷⁾と述べた。これを承けた同年5月23日の教育部の指令は「大学は現存の商部を商学科に改め、法学部の一部にし、できればすぐに準備すべきである」¹⁸⁾と述べている。また、蔡元培は多くの文章の中で、日本の科学教育の重視や女子教育の提唱を賞賛している。蔡元培は清末の教育活動の中で、この両方面の教育に十分な注意をはらいはじめていた。北京大学学長を努めた際、彼は日本人を講師に招き、学生が日本に留学することを強く支持し、かつ、日本に留学する学生のために大量の推薦状を書いていることから、日本の明治維新以後の教育制度に強い関心を持っていたことは明らかである。

4. おわりに

19世紀末から20世紀初期における中国知識人の日本文明の理解の態様、とくに、知識人の代表である蔡元培の日本観より見ると、明治維新後、新たに作られた日本文化は、一方で日本の伝統を保ち、また、東アジア文明を維持しつつ、一方で西洋からの衝撃の下に、西洋文明を理解し、受容して、社会の変革を実現させ、世界観と思维方法の変革を遂げたことの所産である。このような新生文明が、中国の先進的な知識人に

関心を持たれたことは事実である。従来の蔡元培研究者は、彼が、政治的に日本の侵略を批判していたことにのみ着眼しているが、日本の新生文明に対する関心を持っていたことは見逃している。蔡元培のこの日本文明理解の態様を初めて明らかにしたことは、蔡元培研究のみならず、近代日中国家関係の特質の解明にも資する視点ではないかと思われる。ただ、近代中国知識人の日本文明理解の偏りによって、近隣日本の経験を性急に学び、また借用しようとした一部の近代中国の知識人は、日中間の文化の差異性を見逃し、日本文明に対する理解が不十分であったが、中国近代化にとって多少の有益な影響があったことも事実である。

従って、中国知識人の日本文明理解と共に西洋文明理解の再検討を行なうことは、近代化を実現するうえで必要な作業であり、21世紀に向けて重大な課題となっていると思う。

注

- 1) 「蔡元培口述伝略」(拙編『蔡元培先生紀念集』, 北京, 中華書局, 1984年) 250頁。
- 2) 黄炎培「吾師蔡子民先生哀悼辭」(前掲『蔡元培先生紀念集』) 53頁。
- 3) この東文学社は、1901年に中島裁之が設立した東文学社とは異なる。蔡元培らが設けたものは、「蔡元培口述伝略」によれば「東文学社」(前掲『蔡元培先生紀念集』251頁)、「蔡元培日記」では「東文書館」となっている。
- 4) 5) 蔡元培「我在教育界的經驗」(前掲『蔡元培先生紀念集』) 241頁。
- 6) 7) 黄炎培『八十年来』(文史資料出版社, 1982年) 32-33頁。
- 8) 蔣維喬「民国教育総長蔡元培」(前掲『蔡元培先生紀念集』) 25頁。
- 9) 「蔡元培口述伝略」(前掲『蔡元培先生紀念集』) 251頁。
- 10) 蔣維喬「中国教育会之回憶」(前掲『蔡元培先生紀念集』) 28頁。
- 11) 12) 「愛国学社之建設」(『選報』第35期, 教育言六) 22頁。
- 13) 「中国教育会章程」(前掲『選報』第21期)。
- 14) 15) 蔡元培「請于美国退回庚款留学名額中增加北大入選呈」(『蔡元培全集』第3卷, 北京, 中華書局, 1984年) 168頁。
- 16) 蔡元培「全国臨時教育会議開會詞」(前掲『蔡元培全集』第2卷) 264頁。
- 17) 18) 蔡元培「大学改制之事実及理由」(前掲『蔡元培全集』第3卷) 132頁。